



季節を知ったら
暮らしが楽しくなった

〔第七六号〕

立春 りっしゅん

二月四日



蛸路の鋳物師

これまで宇治橋を幾度となく渡ってききましたが、擬宝珠ぎぼしに刻まれた文字はせいぜい年月日ぐらいしか、見ていなかっただようです。先日、知人の西村尚美さんの指摘で、そこに松阪の鋳物師いものしの名前が刻まれていることを初めて知りました。

北側の一番手前（駐車場側）にある擬宝珠には、
「御鋳物師 松阪蛸路たぢ住 常保河内作じょうほ かわち」

と確かにあります。年号は、江戸後期の嘉永六年かえい（1853）六月吉日。蛸路は、今も松阪市上蛸路町、下蛸路町と地名も残っていて、松阪市街から車で十分ほどの射和地区いさわにあります。今でこそ、このあたりは山里ですが、昔むかしは海辺で、蛸釣り松と呼ぶ古い松の木があって、そこで蛸を釣って伊勢神宮に奉納した道筋に当たっていたため、「蛸路」と名付けられたといえます。

蛸路には、茶人によく知られる天命釜てんみょうかまを作った天命家が北畠家を頼って、移り住んだといわれています。松阪市史にも室町時代の「鋳物師天命文書」が記され、松阪近郊の寺の梵鐘ぼんしょうを製作したことが知られています。慶安元年（1648）の銘がある伊勢寺の横滝寺のものが現存する中でも最古となります。

宇治橋の擬宝珠を製作した常保家も、『新松阪風土記』（夕刊三重発行）には、平安期に金の四角灯籠しやうかくとうろうを京の宮中の紫宸殿しんてんや清涼殿せいりやうてんに献じたという鋳物師で、いつごろからか上蛸路に棲むようになり、神宮の御用を勤めたとあります。西村さんによると常保家は現在、二軒残り、昔は金物屋をしていたそうです。

神宮ゆかりの鋳物師の里が、松阪にあったのでした。

文 千種清美

